

2021年4月25日復活節第4主日説教

エゼキエル書 34 章 1-10 節

使徒言行録 4 章 32-37 節

ヨハネによる福音書 10 章 11-16 節

先週、聖職会がリモートにて開催され、今後の見通しについて話し合われました。意見交換が中心で、特に大きな方針が定まったわけではありませんでした。東京教区は東京都のみが範囲となる、比較的狭い地域の教区ですが、それでも各個教会・礼拝堂の状況は異なります。教区としてまとまりをもちつつ、各個教会独自の状況を考慮した方針を決定するには、より一層の情報交換が必要だと思われました。

プロテスタント教会では、礼拝を再開しているという話をいろいろなところで聞きます。わたしが関わっております日本聖書神学校は、超教派の神学校ですが、プロテスタント教会が中心です。同僚の教授たち（皆プロテスタント教会の牧師たち）の牧会している教会や、神学生が出席している教会の状況を聞いても、昨年から礼拝を再開している教会が多いようです。ただし、教会の制度が違いますので、単純比較はできません。プロテスタント教会は、監督制を残している教派を除き、各個教会主義が原則です。それゆえ、感染対策についていえば、自分の教会に適した対策がなされれば、早期の礼拝再開とその維持が比較的容易に可能となるのだと思います。感染対策という視点だけで見れば、各個教会主義的な教会のあり方は有利であるかもしれません。しかし、聖公会は、主教が牧会し導く歩みに即して、教区内の各教会が一緒に困難を経験し、ともに考えて良い方向を目指すことが原則だと思います。その歩みは、時間がかかり、すぐに結論が出ないかもしれません。しかし、それがわたしたちの教会の歩み方です。きっと、個々の教会を通して恵みを受けるプロテスタント教会とは、異なる恵みがわたしたちに与えられると思います。

さて、主教が牧会し、と申しましたが、本日の聖書日課について、もし共通テーマを挙げるとするならば、「羊飼い・牧者」となると思います。旧約日課は、イスラエル・ユダ王国を滅亡へ導いた「イスラエルの牧者たち」（王国の指導者層）への批判の箇所です。福音書は、イエス様ご自身が「良い羊飼い」である語る箇所です。

まず、本日の旧約聖書「エゼキエル書」から見ますと、この「エゼキエル書」は、「イザヤ書」、「エレミヤ書」と並ぶ、三大預言書のひとつです。著者である預言者エゼキエルは、バビロン捕囚の直前から、その捕囚のただ中という期間の中で活動したと考えられています。イスラエルという王国、言い換えれば、神の王国（国）滅亡前後に活動した預言者でした。

イスラエル王国自体は、「エゼキエル書」が書かれる300年以上前に南北

に分裂し（紀元前922年）、また北の王国（北イスラエル王国）は150年ぐらい前に滅亡していました（紀元前722年）。預言者エゼキエルが直面していたのは、残った南の王国（南ユダ王国）の滅亡の時期でした。その意味では、地上にある神の王国（国）の完全消滅ということであり、主なる神様とイスラエルへのより一層の深い思いがあったと思います。

そのため「エゼキエル書」の内容は、三大預言書のひとつといっても、他の二つとは少し趣が異なっています。全体が、「裁きの部分」（1～24章）、「諸国民への託宣」（25～32章）、「終末論的な回復の預言」（33～48章）に分かれますが、最後の部分では、バビロン捕囚のただ中でありながら、イスラエルの回復、新しいエルサレム神殿の回復が、細かい描写と共に預言されています。また、イスラエル再建に際した、12部族に土地の配分まで預言されています。預言者としての批判的な言葉があると同時に、回復に向けた言葉も豊かであるのが、「エゼキエル書」の特徴です。

本日の34章は、回復の前に、バビロン捕囚というような国の崩壊を招いたイスラエルの指導者たちへの批判が書かれています。その批判は、「**人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい**」（エゼキエル34:2）とある通り、イスラエルの指導者たちを「牧者」にたとえています。

「牧者」とは、羊、山羊などの世話をする人です。『聖書』では、様々な個所で用いられる言葉ですが、ここではイスラエルの指導者たちが、「牧者」にたとえられています。それは、その職務がこの「牧者」のように、王国内の人々を導き養い守る勤めであったからです。しかし、それだけではありません。そもそも、主なる神様がイスラエルの牧者であるからです。

有名な詩篇23編で「主は私の羊飼い、あるいは牧者」という表現がある通り、主なる神様がイスラエルの牧者であるということは、イスラエルの多くの人々が認識する事柄です。しかし、それは神様に対する一表現ではありません。むしろ本質を示す事柄です。主なる神様とは、単なる畏敬や信仰の対象ではなく、イスラエルを羊として、愛し、守り、導く牧者であるからです。つまり主なる神様が羊飼いであるとは、イスラエルとの関係が、主従関係を越えた信頼関係であることを示しているのです。それゆえ、イスラエルの指導者は、王であれ、祭司であれ、預言者であれ、牧者である主なる神様の代理としてのみ存在しうるのです。

そのような存在のありようは、宗教的指導者にも限らず、官僚のような存在、あるいは広い土地を所有する豊かな人々、それら権力や富を持っている人々に当てはまります。富、力、才能は、自分のためではなく、イスラエルの主なる神様が、牧者であることを示すにほかなりません。それが、イスラエルという王国が、他の王国とは違う点です。しかし、現実には、そうはいきませんでした。「お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、か

えって力づくで、苛酷に群れを支配した」(エゼキエル 34: 4) とある通りです。主なる神様の代理としての牧者であるべき指導者たちは、自分の利益のために働き、国の崩壊を招いたのでした。それゆえ、「エゼキエル書」はそのことを厳しく批判しているのです。それは単に政策を失敗したとか、計画が浅はかであったというようなことではありません。根本から自分たちの存在のあり方を勘違いしたことへの批判です。

「エゼキエル書」にあるこのような批判は、イスラエルという紀元前の王国に起こったことに基づいて語られたことですが、歴史上のイスラエルの事柄にとどまらないと思います。つまり、いつの時代においても、どの国において大切なことではないかと思います。もちろん、すべての国や地域、あるいは文化や歴史が、『聖書』の主なる神様に関連しているわけではありません。しかし、各個人の能力が違うように、現在世界中の国は様々な違いがあり格差があります。そのような中で、様々な意味で豊かな国あるいは強い国、豊かな人々、あるいは能力のある人、それらの人々がもし自分たちがなぜそのような状態にいるのか、その意味や責任は何か、そのことをもう少し自覚することがあれば、世界は変わるのではないかと思うからです。

さて、主なる神様が「牧者」であることを、自らの行動を通して、もっとも明確に示して下さったのが、イエス様です。そのことをより直接的に物語っているのが本日の福音書、「ヨハネによる福音書」です。そもそも、ヨハネは、他の福音書とは異なり、イエス様が誰であることを示していることが特徴の一つです。イエス様自らが、「わたしは、～である」という形で、物語の各所で様々な形で示します。本日の個所がそうです。

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ 10: 11)。ここではイエス様がご自分のことを「羊飼い」とであると語っています。

「羊飼い」とはもちろん「牧者」のことですが、この表現は、「エゼキエル書」、すなわち「旧約聖書」を通して示される、主なる神様の在り方を明確に示しています。しかし、それ以上に、「旧約聖書」を通して示される、主なる神様とイスラエルとの関係が、より明確に、かつ広い意味を持って示されているのです。イエス様は「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。」(ヨハネ 10: 14-16) と語りますが、ここで示されているのは、イエス様を知り、イエス様を信じる人は、イエス様を通して、父なる神様との関係に入ることだからです。なぜならば、イエス様と父とは一体であるからです。イエス様を信じるとは、単に新しい信仰を持つということではなく、「旧約聖書」がイスラエルの歴史を通して示し続けていた、主なる神様と人間とのあるべき関係に入ることを意味するのです。そして、そうであるがゆえに、その関係はイスラエル・ユダヤ人に限定されるものではなく、また教会という組織に限定されるものでもなく、すべての人

に及ぶ関係となります。それは、「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」(ヨハネ 10:14-15) とある通りです。信仰を持つという行為、教会につながるという行為も、自分自身のためであると同時に、それ以上の意味を持つのです。つまり誰かに主なる神様を示すという意味を持つということです。

ただし、「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」、このイエス様の言葉を、世界中の人々がキリスト教徒となることだと受け止めることは、少し意味を狭めていると思います。主なる神様ご自身が牧者として、その御子であり良き羊飼いでもあるイエス様を通して、すべての造られたものに対して示された大切なこととは、組織や制度としての教会という存在、あるいは何らかの特定の属性を備えたキリスト教徒という存在が、数的に増えることが目的ではないからです。主なる神様と造られたものとの関係が、上記の羊飼いと羊との関係のようによくなることに他ならないからです。そして、教会あるいはキリスト者という、すでにイエス様を通して、主なる神様と羊と羊飼いとの関係にある存在にとって大切なことは、その関係の尊さ・すばらしさを歴史の歩みの中で世界に示すということであるからです。

イエス様の時代に、過去を振り返って、「聖書」(旧約聖書)の「エゼキエル書」が示していた出来事は、何年ぐらい前かと問えば、それは、約500年前になります。イエス様の到来とは、500年前の預言が、成就した事柄なのだと、最初の教会の人々は『聖書』から理解しました。良き羊飼いであるイエス様を信じる教会が誕生してから、すでに2000年の時を超えています。わたしたちの教会の歩みも130年以上を超えています。わたしたちが歩んでいる現在の世界の状況を考えるとき、そしてその世界の中で、様々な意味で富や力を持つ人々のあり方を見ると、エゼキエル書の批判でも足りないような現象が起きていることがわかります。また、そのようなあり方が改善される傾向にあるというよりも、一層悪い方向へと向かうのではないかと思います。しかし、だからこそ、『聖書』の言葉が今も響くのです。そしてわたしたちが、その響きに応える必要があるのです。

各個教会には、それぞれ特徴があり、また固有の課題があります。わたしたちの教会にも、固有の課題があります。その課題を解決することも大切です。しかし、忘れてはならないことは、わたしたちの教会がここに存在しているのは、わたしたちのためであると同時に、主なる神様を世界に示すためであるということです。その課題は簡単には解決しないかもしれませんが、そのことを深く心に刻み、これからも一緒に歩みたいと思います。羊飼いである主なる神様と、羊である世界中の造られたものが、イエス様を通して示された愛の関係になるまで、またすべての羊同士が、愛の関係になるまで、教会を大切にして、教会につながりながら歩み続けたいと思います。